

David Damrosch
What Is World Literature?

Princeton, New Jersey: Princeton UP, 2003, 324 pp+xiii

秋草俊一郎

人が「世界文学」と聞いたとき、真っ先に思い浮かべるものとはなんだろうか。かつて大手出版社が次々と刊行し、日本中の中産階級の書架を一種のインテリアとして彩ったが、今は巨大恐竜の化石よろしく古書店の奥ではこりをかぶっている『世界文学全集』だろうか。デイヴィッド・ダムロシュのこの著作¹は、まさにタイトルでその問題を私たちに問いかけている。

このあまりに漠然としたタイトルを持つ研究書の要諦をつかむには、まず冒頭の“Introduction: Goethe Coins a Phrase”を、その次に悼尾の“Conclusion: ‘World Enough and Time’”を読むのが得策だろう。もともと「世界文学 “Weltliterature”」という用語はゲーテが初めて使ったとされるが、序章で著者はゲーテとエッカーマンの有名な対話を紹介しつつ、ほかの理論家の意見を参照しながら「世界文学」を再定義している。さらに終章（そのタイトル “World Enough and Time” はアウエルバッハの『ミメシス』にエピグラフとして用いられたマーヴェルの詩の一節）では、著者の考える世界文学が理論的に集約された形で端的に示される。それによれば、世界文学とは以下の三つの項目で定義される。（1）世界文学とは、国民文学を楕円状に屈折させたものである〔秋草注：「発信する側」と「受け手の側」との二つの焦点あいだに広がる空間こそ世界文学の生きる空間であるといった意味〕。（2）世界文学とは、翻訳を通じて価値を増すものである。（3）世界文学とは、あれこれのテキストの一定のカノンではなく、読み方のモードである。自分自身の時間と場所を越えたところにある多様な世界に、ある距離をおきながら関わっていく形式である。

こうした定義が実際にどのように使われているのかは、“Circulation” “Translation” “Production” という大きなカテゴリーごとに各三章から構成された、計九章のまったく別個のテーマを扱った「実践」の場である本論を読むほかない。スラブ文学という観点からは、これらの章の中で直接的に私たちに関係するのはミロラド・パヴィチの『ハザール事典』（1983）を論じた九章の“The Poisoned Book”だけである。これは、日本語を含め三

¹ この本についてはすでに沼野充義による日本語の紹介がある。「世界（文学）とは何か？」『UP』2005年1月号、29-34頁。

十近い言語に翻訳されたこの事典形式の書物の翻訳・出版をめぐる数奇な運命を扱った魅力的なエッセイである。このヨーロッパの「辺境」から生まれた世界文学もまた、ユーゴスラヴィアという国家の分裂と共に、セルビア＝クロアチア語から、セルビア語に「翻訳」されてしまった。言うまでもなく、こうした事情は混乱した状況を作り出すことになった。さらにユーゴスラヴィアという今はない国の歴史的な文脈に照らしてみた際に、この作品がいかにか政治的な解釈を許容するのかという問題を、著者は内容に踏み込みながら丁寧に読者に啓蒙しつつ、その一方でこうしたローカルな問題をまったくはなれた文脈でも、この「世界文学」は力強い普遍的な価値を持ちうる作品なのだという点を強調している。アルファベット順に項目を列挙するという事典形式をとっているこの作品は、翻訳される言語によってまったく違う配列になってしまうのだ。まさに多くの言語に翻訳されることで、多様な解釈を許容するようになり、「価値を増した」作品の好例と言えよう。

だが、むしろ「世界文学」を堪能するためにはスラブ文学とは関係の薄いほかの章にも目を通してみることをお勧めする。というのも、こうしたダムロシュの方法論が冴えをみせるのは、論じる対象やテーマが「今、ここ」からできうる限り離れるときだからである。その意味で、四章の“Love in the Necropolis”は刺激的な章になっている。この章の中で著者はラムセス五世時代のエジプトの象形文字で描かれた詩を扱っているのだが、その複数の英訳の「揺らぎ」に着目して解釈にまで踏み込む手際は見事としか言いようがなく、現代に生きる私たちにはほとんど想像することもできない古代エジプトのテキストに、新たな生命を吹き込むことに成功している。ダムロシュは世界文学の生きる空間を、「二つの焦点（作品の発信源である文化と受け入れ先の文化）を持った楕円状の空間」と定義するが、まさにこの章こそ本書でその楕円が最大になる瞬間であると言えるだろう。同じように、紀元前二千年の『ギルガメッシュ叙事詩』の発見と受容をめぐる一章“Gilgamesh's Quest”も射程の大変広いエッセイで推奨できる（反面、カフカの英訳の変遷をたどった六章“Kafka Comes Home”は素材が「メジャー」すぎたためか、味気なく感じた）。

こうした視野の広い風通しの良い論考を、全編を通じて支えているのは、最終章で著者が述べているように、スペシャリストとジェネラリストという異なる二つの視点である。それは著者の学者としての良心と、読者としての好奇心と言い換えてもよい。前者は緻密で精確な調査と、集約的な議論によって求心力として働き、各論考をしっかりと地に足がついたものとし、後者は常に未知のものに触れようとする食欲な冒険心と、幅広い興味の下での膨大な読書量によって遠心力として働き、自分の立ち位置に基づいたアクチュアルな読み方を追求する。おそらくどんな研究者の中にも存在するだろうこの二つの人格を制御する絶妙なバランス感覚、そしてその二つを融和させる、時間・場所・言語を越えて作品と人間を結ぶ「文学」が持つある種の力への揺るぎ無い「信仰」こそ、本書の骨子なのである。

本書で扱われる「文学」は、通常文学として扱われる詩や小説だけでない。八章の“Rigoberta Menchú in Print”では、グアテマラの人権擁護活動家でノーベル平和賞も受賞したリゴベルタ・メンチュが自らの差別体験を語った「告白」すら分析の対象になる。この中で著者はその「告白」が、実は多くのフィクショナルな要素を含んでいること、その英訳が果たした役割などを測定し、その影響力の大きさとその現実と夢との相互作用から「世界文学」として位置づけている。このような開かれた態度こそ、世界文学の徒にふさわしいだろう。

そして著者にとっての「世界」とは、限られた視野に収まるものではなく、こうした新しい文学との絶えず更新される出会いの場なのである。本書を読めば、世界文学とはあの『世界文学全集』の類ではなく、私たちひとりひとりの実践にかかっていることが納得できよう。ダムロシュ自身、三章の“From the Old World to the Whole World”でヨーロッパ中心主義的に編纂された「世界」文学全集の歴史を批判的に概観している。今や「非西欧」の文学——アジア・アフリカ圏の文学や、女性作家や黒人作家に代表されるマイノリティーの文学の重要性を疑うものはいない。こうした流れの中で、硬直したカノンが役に立たなくなっていることは誰の目にも明らかであろう。著者が勧めるのは個人によるマイクロカノンの作成と、作品を『源氏物語』+『千夜一夜物語』+『デカメロン』や『源氏物語』+『女の都』+『トリスタン』や『源氏物語』+『クレヴの奥方』といった異なる文化的文脈の共鳴＝読み方のモードのもとで読み直すことである。

比較文学にかつての勢いがなくなっているように見え、どっちつかずの姿勢が災いして「うどん定食」などという誹謗を受けることが多い昨今、この本は自身コロンビア大学で比較文学を教え、アメリカ比較文学協会のプレジデントも務めたダムロシュによる世界文学の旗印の下での比較文学再興の企てなのであるとも言える。だが、ダムロシュの主張は私たち単一の地域や言語を専門とする研究者にとっても十分示唆的である。成果主義が叫ばれるなか、いち早く確実に業績をあげるために閉塞的な専門性に引きこもってしまうことの問題点についてはよく論ぜられるようになったが、本書を読めばその弊害はおのずと明らかだろう。こうした実践から得られるものは、そのために生じるいくつかのミスを補って余りあるものだと言えよう。他人にしつこく「専門」を聞いてその話しかしないという、この業界にいるものがやりがちな行動も考え直すときかもしれない。私がいつも奇妙に思うのは、ロシア文学者同士でフランス文学の話をしたり、あるいはドイツ文学者と英文学者で中国文学の話をしたりしている現場にいまだかつて出くわしたことがないということだ。しないのか、あるいはできないのか。

終章では実際に「世界文学」を実践するためにいくつかの提言がされている。例えば著者は、「世界文学」の中に翻訳作品も含めることを提言し、外国語の古典を取り扱うときに複数の英訳を駆使するのであるが、こうした手法はロシア文学研究にも十分応用可能で

あるように思えるし、また外国語学習についての「言語学習は文学研究の予行演習ではなく、人生のパートナーなのだ」といった発言にも多いに励まされる。また、他ジャンルの専門家同士の交流の必要性などにもうなずかされる。世界は十分広いし、私たちには時間はたっぷりあるのだ。

私たちの手にしている「世界文学とは何か」と題された本書こそ、問いかけであると同時に、上記のようなプラクティスの集積として最上の「世界文学」なのであり、著者からの回答そのものなのである。それは本質的に誰もがアクセスしうる可能性を持った「世界文学との対話」なのだと言ってもよい。序章によれば、ゲーテと対話したエッカーマンは後に英訳の編者によってその存在をほとんど抹消されてしまった。だが、ゲーテが目指した世界文学の思想を紹介したエッカーマンの功績が朽ちることはない。同様に、ダムロシユの真摯な対話が私たちにもたらすものは大きいだろう。